

ネパール ダリット女性のとりのくみ

小森 恵 (IMADR事務局次長)

IMADRは2011年4月よりパートナー団体であるネパールのFEDO(フェミニスト・ダリット協会)と、「ダリット女性の健康の権利と保健サービスへのアクセス」という共同プロジェクトをパルサ郡で始めた。そのプロジェクトを見学するため、2011年11月末にネパールを訪問した。

首都カトマンドゥから国内線に乗って20分、パルサ郡は東西に横長のネパールの中間あたりに位置し、南はインドと接している。海のないネパールは、どこへ行っても大抵、中国、インド、バングラデシュのいずれかと隣接している。東アジアに近い風情をもつカトマンドゥとは異なり、パルサは南アジア圏にいることを強く感じさせる。空港ではパルサ支部長ニラさんが待っていてくれた。FEDO本部から同行してくれたカマラさんと3人で、パルサ支部に最近できたグループとのミーティングに向かう。

FEDOは1994年に創設された国内唯一のダリット女性の団体だ。創設当時、女性運動はすでに存在していたが、『マイノリティであるダリット女性の視点から主張をしていくには、自分たちで運動をつくるしかない』と確信したリーダーたちが集まってつくった。人口の約10%を占めるダリット女性は、さまざまな生活指標(平均寿命、就学率、識字率、健康ほか)で平均を大きく下回る。社会の周辺に追いやられ、権利を知らされず、機会を奪われてきたダリット女性の中には、たとえば、保健所での無料の検診、公立病院での無料医療、65歳以上の老齢年金などについて知らない人が多い。とくに、農村に行けばその傾向が強い。また、知っていたとしても、不可触制の慣行が根強く残る社会では、「ここの保健所にダリット出身の保健師がいれば検診してあげる…」と言って利用を妨害する公務員もいる。

現在、全国に支部45、グループ2000、メンバー4万を有するまでに発展したFEDOは、地方に裾野を広げ、草の根レベルでダリット女性の意識覚醒を進めている。この保健プロジェクトもそうした運動の一環だ。本部からは金銭的支援は一切ない。しかし、組織化、

行政交渉、意識化、権利教育、アドボカシーなど、必要な知識とスキルの共有は全面的に支援する。むしろそうすることで広がってきた。また地元では、FEDOは孤立して活動をしているわけではない。他の団体とのローカルネットワークは地方都市でも進んでいる。民主化を果たしたあと、制憲議会が招集され、満足できる数ではないが、ダリットや先住民民族コミュニティからも議員が送りだされ、政党政治が地方にまで浸透してきた。それに呼応するかのように市民運動も花開いた。新憲法制定を目前にするネパールには、ダリット関連の非営利団体も急速に増え、未登録も含めれば現在5000はあるといわれている。FEDOはそういった意味からも先駆的であった。

パルサ滞在中、4つのグループを訪問した。そのうち3つは結成間もなかった。4つともそれぞれ同じダリットの集落の中でつくられている。毎月50から100ルピー程度の会費を集め、共同で貯蓄をしておく。個人の緊急時に貸し付けたり、共同でろうそく作りに取り組んで市場に出したり、使途はさまざまだ。家人の病気など、いざという時にまとまったお金が出せない女性たちにとって、共同貯蓄は心強い。これまでやったことがない役場や保健所での交渉も、ニラさんのような支部の専従と行動をともにしてスキルを身につけていく。家族の栄養管理、衛生管理、健康管理など、いままで意識さえしなかった世界が目前に広がる。ほとんどが専業主婦であるメンバーたちは、知ること、学ぶこと、身につけることを喜んでいる。DVは共通の社会問題であることも自覚するようになった。グループで集まって問題を話しあうことが、すでにカウンセリングになっている。

「いろいろと話をするようになった」、そう語る女性たちは、みんな生き生きしていた。小さなプロジェクトである。しかし、IMADRがこうしたプロセスにかかわれることに喜びを感じた。

(こもりめぐみ)

パルサ郡のダリット女性たち



「野原でウンチは止めましょう」